

208

^{99m}Tc -PI によるコロイド肝シンチグラム欠損像の検討

兵庫がんセン 放

○熊野町子, 松尾利樹, 檜林和之

^{99m}Tc -Sn-colloid 肝シンチグラムで欠損像の認められた肝疾患に対して ^{99m}Tc -PI を用い、欠損部の肝胆道系の性状を検索したところ、 ^{99m}Tc -PI が肝腫瘍の診断に利用し得ることが判明したので報告する。

方法: ^{99m}Tc -Sn-colloid 肝シンチグラムで欠損像を呈した 60 症例 (びまん性肝疾患 13 例, 原発性肝癌 34 例, 転移性肝癌 8 例, 転移性肝癌の疑い 5 例) に ^{99m}Tc -PI を 5 mCi 静注し、シンチカメラを用いて注入 10 秒から 60 秒迄は 5 秒間隔の露出時間で連続撮像した。ひき続き 1 分～2 分の preset time でシンチグラムを撮像した。その後は 5 分ごとの preset count 150K にて 60 分後経時的にシンチグラムを得た。シンチグラムを動脈相 (10 秒～30 秒迄)、門脈相 (30 秒～1 分)、肝血液プール (1 分～2 分) 並びに肝胆道シンチグラム (5 分～60 分迄) の各相につき疾患別に比較検討した。

成績: びまん性肝疾患 13 例のうち 10 例は胆嚢 (6 例)、胆管 (5 例) による偽欠損像であることが判明した。さらに肝シンチグラムで転移性肝癌を疑った 5 例は胆管 (4 例)、胆嚢 (2 例)、腎 (1 例) 等による偽欠損であった。他方、原発性肝癌 34 例のうち 18 例に肝シンチグラムの欠損部に ^{99m}Tc -PI の集積を認め、7 例に肝シンチグラムの欠損より大きい欠損像を認めた。残り 9 例は両シンチグラムで同じ形態を示した。このように肝シンチグラムと ^{99m}Tc -PI 肝胆道シンチグラムで原発性肝癌 34 例中 24 例に解離像が認められた。一方、 ^{99m}Tc -PI による RI-アンジオグラフィを施行した原発性肝癌 32 例中 22 例に動脈相で病巣部に集積像をみとめ、門脈相では 32 例中 18 例に集積をみた。さらに、肝血液プール相では 34 例中 20 例に腫瘍部に集積がみられた。転移性肝癌では各相いづれも集積性は得られなかった。

考按並びに結語: 肝シンチグラムで肝門部の欠損を呈した症例に ^{99m}Tc -PI 肝胆道シンチグラムを併し、肝門部欠損が肝胆道系による偽欠損である場合の判定に有用であった。さらに、原発性肝癌に集積性を認める症例が見られ、これは肝細胞と同じ代謝過程で、腫瘍細胞に摂取され、肝胆道系に排泄されたものと推定され、原発性肝癌の症例による集積性の差は肝細胞癌の分化度の違い並びに胆管形成の有無によることが考えられた。

^{99m}Tc -PI は RI-アンジオグラフィとしても応用可能であり、注入早期相での集積像は肝病巣が血管増生であることを示し、経時変化をみることにより、病巣部の診断に有意義な情報を与えてくれる等、 ^{99m}Tc -PI は肝腫瘍シンチグラフィとしても利用し得ることが判明した。

209

肝シンチグラフィーにて S O L を確認した症例に於ける AFP, CEA, 及び H Bs 抗原抗体との関係の検討

兵庫県立塚口病院 研究検査部 RI 検査室

○稻本康彦, 東谷康治, 白木 量,

中田成己

肝腫瘍、特に原発性肝癌と B 型肝炎ウィルスとの関係は近年注目を集めている。吾々の病院で 1977 年に肝シンチグラフィーを実施した症例に於いて、RIA 法による CEA, AFP, H Bs 抗原、抗体との関係を検討したので報告する。

1977 年に於ける肝シンチグラフィーの実施件数は計 350 例で、その内正面、背面、右側面のいずれかに於いて S O L を確認し得たものは 31 例であり、臨床所見の諸種の検査結果と合わせて最終診断で原発性肝癌と考えられたものはその内 24 例である。その他の症例は他臓器よりの肝転移であった。原発性肝癌と診断した症例で、肝シンチグラフィー上で up take の増強した脾腫、骨髄の描出等一般に肝硬変の pattern とされているものはその中で 12 例であり、男女比は 20 例と 4 例で男性が多数であった。年令的には 30 才より 78 才迄わたっているが、60～65 才が最も多かった。肝腫大は 24 例中 14 例であった。

H Bs 抗原陽性例は 9/21 例で約 43% で、抗体陽性例は 11/21 例で約 52% であり、抗原又は抗体の陽性率は 19/21 で 95% で、抗原と抗体の両者が陽性例は 4 例であった。一般的日本人の抗原陽性率 1.3～2.6% 及び抗体陽性率約 20% (内科 30, 1974) よりかなり高値を示している。原発性肝癌で AFP 300 $\mu\text{g}/\text{ml}$ 以上は 15/24 例、1000 $\mu\text{g}/\text{ml}$ 以上は 12/24 例であった。併し CEA 5 ng/ml 以上は 2 例のみであった。転移性肝癌では、H Bs 抗原及び抗体の検査施行例は 7 例中 3 例であり、その内 1 例のみ抗体陽性であった。併し CEA 5 ng/ml 以上は 6/7 例と多数を示した。

結語 当院での原発性肝癌症例に於いて H Bs 抗原抗体陽性率は有意に高値を示し、B 型肝炎ウィルス感染予防の必要性が強調される。